

附  
い、とうに死んだ親父の血が俺に流れてゐる。俺は政黨をも一度仕立て直す義務がある。その爲めに、俺は貴様達と手をにぎるのだ」

毛利の死んだ親父といふのは作太郎といつて日本の政黨創造時代に刃の下をくゞつた人であつた。毛利は續けた。

「俺は、君達は何ういはうと、私情からいへば鈴木單獨内閣が作りたいたんだ。その片棒を擔いで居れば政黨の反逆者扱ひも受けなくて済む、ナア杉さうだらう」

「出来ないから仕様がな。もし出来たら其の日に潰れる。若い者は、俺達をまでもダラ幹だと言つてをる。維新の志士は無名の青年だつた。今日の志士は無名の軍人だ。それを認識せずして國政を運用しようといふのはコンパスなしで荒海を横切らうとするものだ。平野内閣に依つて、強力政權を樹て、對外問題をまづ片づけばしから片づけて行くより外に内をまとめる途はない。さうと知つてゐる筈の君が、今更ら、私情で愚痴をいふのは可笑しいぢやないか」

「やらう。一身の利害を考へて居る時ぢやない。もう此話はよせ！」

「お呼びでございますか」

おつるが襖をあけた。

「腹が空つたな。黒井も杉も未だ飯は食つちやゐない。何か食ふ物をもつて来てくれ」

もう夜の九時である。毛利は飯時を忘れる程頭の方が回轉する數日であつた。

「僕は天ぶらそばを二つ取つて貰はう」  
杉である。

「も少しうまい物を食はんと身體が持たんぞ、牛肉か鰻でも食つて精力をつけて、お前も睡眠不足を補充するさ」

これは毛利である。

「天ぶらそばとはさすが田舎漢だ。質實剛健だ」

黒井がひやかした。

「これでもぜい澤だ。あの連中に天ぶらを食はせて呉れつて錢を渡して来たんだよ。だから俺もこれでいゝのだ。君達は勝手に食ふがゝ」

事件で自首した若い人々を思ふこの純眞な將校は、飽迄天ぶらそば二個を主張して譲らない。

おつるは、黙つてこの問答を聽いてゐたが、杉といふ將校を、頼母しいものに思つた。だから、すべて杉の思惑を亂すまいとして、料理も酒も運んで來なかつた。勿論、酌人を招ぶことは絶対に避け

ねばならぬことよ、おつるは心得た。

「どうも、何だな杉、政治家も外務省も、軍部に追隨するより外に道がない様だな」  
毛利は愉快さうに笑つた。

「天ぶら迄、引づるんだから叶はないよ。兵隊つて奴はうまい物を知らんから向ふ見ずなんだ」  
と黒井が相槌をうつて笑つた。毛利は之に和していふ。

「さあ杉、来たよ、お前の最もぜいたくな食物が」

「暖かい中に何卒召し上つて下さいまし」

おつるは先づ杉にすゝめた。

「おつるさん。さつき毛利君が言つてゐたが、僕は君に評判が悪い相だね、悲觀したぜ」

「まあ……何故で御座いませう。先生、何かおつしやつたんですか」

「ウム。杉にな、女を世話してやらうかと言つたら女でもおつるの様なのはお母さんのやうで好いが、若い妓ぢや不服だとさ」

「まあ……杉さん、ほんとうで御座いますか、お人の悪い。もう天ぶらそばを御馳走してさし上げませんよ」

「それや困るナ。天ぶらだけは食はして貰はんと、この勢で政黨を潰すんだからな。ハ、ハ、ハ」

杉は冗談から、眞面目に飛躍した。

「おつるさんの様な女が満洲へ行つてくれるといふんだがな。吾々仲間のおふくろ見た様になつて世話してくれるといふんだがな。全くあつちにある女は、人を食ふ事ばかり考へやがつて少しも同胞の爲に計らうつて氣がないんだ」

すると毛利は眞顔になつて言ふ。

「おい杉、何か陸軍の宿屋かクラブ見たいなものが出来るんだらう、新京へ。そいつをおつるに經營さうか、資金は俺が出す」

「それや好い、名案だ。軍人會館が出来るんだが、食堂とか料理部とかは誰かに受負はせにやららん。この人ならうつてつけど。どうだ、おつるさんやるか」

「やるもやらんもない。やるな。お前と俺でお膳立てしてやればいふ。これも重要國策の一端だ……ナアニおつるは金を貯めて親父やおふくろや子供を樂にしてやれやいふ」

「子供があるのかい。驚いたナ」

「あるにも、三人もあつて、亭主に死に別れだ」

おつるはさすがに女の身の上をさらされて羞かしいか、顔を赤くしてうつむいてゐる。然し、毛利が冗談にも、人の將來を約束する様な男でないことをわきまへてゐた。

「いやですわ、先生。今夜はウキスキーを召し上り過ぎはしませんか」

黒井が口を入れた。

「おつるさん、僕が證人だ。大丈夫だ。平野内閣が出来上つたら、賞與に、満洲のお母さんになるサ。杉も何れ參謀で行くだらう」

「ありがたうございます。お證人さまお忘れなく……」

おつるは冗談とも本音とも分らぬ微笑を浮べて黒井のそばのフタを取るのであつた。杉の方は、もう、二ツ目に箸をつけてゐる。

毛利は腕を組んで唇を噛みしめてゐる。そばに箸をつけようともしない。おつるは、彼の氣象をのみこんでゐるので、召し上れ、ともいはず、何れ密談が續くものと察して室を出て行つた。

三

おつるはやがて一片の紙きれを持って來て毛利に示した。

「土屋様、清水様、川崎様御來訪」

と書いてある。客の名前、電話の取次、他と對談中は一切口頭で言はぬことになつてゐる。これは注意深い政治家だけが用ひるやり方であつた。

「あつちの室で待つてゐて貰へ」

斯ういふ場合に、待合はその效用を發揮する。室の構造が、隣室と隔絶してゐる。客と客とが容易に顔を合さない。誰の私邸でも餘程大きく、室を幾つも取つてない以上、來客の鉢合せで困ることが屢々ある。毛利の私宅は小さかつた。官舎は開けつばなしであつた。新聞記者が、役人が自由に出入した。

「それちや又明日の晩、會はう。今から向ふの客と會つて、それから又出かけて來る」

杉と黒井が歸ると、入り代りにいま來た三人が毛利の居城へ案内されて來た。坐るか坐らぬかに土屋は口を切つた。

「大將、成功しましたよ。總裁が、われ／＼代表者の要求を容れて、貴下を副總理、内務大臣として組閣する約束をしたんです」

毛利はギクツとした。

「總裁は、君の力で總裁になつたことをよく承知して居る。副總理は當然な話だ……」  
 最年長で、毛利の兄貴分にも當る清水が言ふ。川崎はこれに和す。

「鳥山氏が、後で茶々を入れても總裁の決心を覆へすことは出来んと思ひます」

毛利は、腕を組んだまゝ一言も發しないが、心の中では、困つたことになつたと思ふ。

この訪客三人は、毛利幕下の三勇士といはれる程の間柄である。毛利を主盟とする政友會代議士數十名は、殆ど秘密結社ともいふ可き團結力と爆進力をもつてゐた。犬養總裁が凶彈に仆されて、扱て後繼總裁を急速に決めなければならぬ時に、候補者は鈴木友三郎と床波竹二郎が對立した。

この兩人に差し支へあらば、前に一度總裁をやつたことのある大藏大臣の高橋清を暫定總裁にして時の推移を見るといふ床次派の、表面的穩着論も亦有力に傳へられた。

何しろ、その凶變直後の政界常識では、當然政友會内閣の再出現といふ輿論だつたので、誰にも後繼總裁即後繼内閣總理大臣として考へられた。だから、總裁を奪還するといふことは、黨内各勢力派閥に取つて、死ぬか生きるかの問題だつたのである。

鈴木は、毛利と文相鳥山の兩翼に支持されてゐた。この兩翼の新興勢力に對して反抗せんとする舊派の人々を主とし、毎々に毛利、鳥山に壓せられてゐる弱少プロックは勢ひ床波を擁立して彼等の勢

力に對抗の機會を掴まんとした。

もし、何等の工作も施さぬ間に、黨内の一般投票を行なつたならば床波派は散票を掻き集めて當選したかも知れない。然し乍ら、毛利は、凶變直後に、彼の幕僚長清水に急命を下した。「鈴木をデッチ上げるんだ！」

その晩から、清水、土屋、川崎を中心とする毛利の手兵數十名は、山王ホテルに陣を構へて、まるで戦争のやうな徹夜の活動をはじめたのである。一方鳥山の方は、自分の邸を本據にして情報を集め、中立と目される者の勸説手段を講じた。けれども山王ホテル組は、より以上に動いた。殆ど非常手段ともいふべき強力金力工作、潜入、あらゆる手を盡して、連判状を作つた。鈴木擁立同盟のそれである。そして三百三名の過半数を忽ちにして握つてしまつた。

毛利一派がかういふ強硬方針を進めるので切角獲得した未曾有の大勢力が眞二つに分裂しはせぬか、と恐れられた。が割れれば割れたで、却つて脂肪過多症の脱脂法的作用をなして健康になる。構はんから押せ〜といふのであつた。

鈴木擁立派は、既に大分裂しても惜しくない丈は連判を集めた。集めてをいて、扱て次の手はといふと、總裁は公選すべしといふ論を樹てた。公選すれば鈴木が勝つに定つてゐる。しかも黨には死ん

だ規則ながら、總裁は公選とし、その任期を七年にするといふ明文がある。表面きつて陰謀だ、とケチをつける餘地は残念だけれどもなかつた。

大勢がかう定ると、之れに反抗する者は逆に黨の擾亂といふことになる。それが嫌なら脱黨しなければならぬ。

反鈴木ともいふべきいはゆる巨頭岡崎邦太郎、餅月慶助、久原房太郎、といつた人々は、逆に床波を説服して鈴木擁立を全黨一致の形式にもつて行くといふ風向に變つたのである。床波は岡崎、餅月、兩説得使の來訪を受けて即坐に鈴木推戴を承知した。

だいたい、かういふ筋書で鈴木總裁は出來上つたのである。

鈴木政友會内閣は目の前にぶら下つてゐるかに見えた。

清水、土屋、川崎達は勿論信じ切つてゐる。毛利は當然副總理である可きだ。さう思つて運んだ仕事であつた。なる程毛利自身から内命を受けてはゐない。大體毛利といふ男は、口が腐つても自分の黨官運動などする男ではないことを承知してゐればこそ、幕僚が獨斷でやつた仕事である。不服をいはれる筋は少しもない筈である。

然るに、毛利は腕を組んだ體取りこくつてゐるのである。

「僕が悪かつた」

毛利は吐き出すやうに言つた。

「君達は、僕をそんなに迄思つて呉れてゐる。なのに、僕の考へてゐることは、君達と違つてゐる。僕は、鈴木さんの内閣が出來ても入閣しない。」

これは、三勇士にとつて、爆弾である。何故爆弾が仕掛けてあつたか、判断の仕やうがない。年長の清水は然し自らの思慮不足を感じたらしい。

「僕等が悪かつた。黨官運動なんかして君の氣持を壊したのは悪かつた。總裁をデツチ上げた返禮を寄來せと迫る、ナル程君の氣象には合はん……」

「大將、鳥山氏に義理をたてゝゐるんですか、當然副總理、内務大臣を以て自他共に許す鳥山氏を押しつけたと思つてゐるんでせう」

土屋は叩いた。

「鳥山氏は、軍部にボイコットされてゐます。あの人のあけすけな自由主義が容れられない。よしわれ／＼が一致して内務に推薦して、もし就任したとして、その結果はどうなりますか。これは僕等より大將の方がよく知つてゐる筈だ。鳥山氏に関する中傷の怪文書は既に横行してゐる。こゝで無理す

附  
ればあの人の将来が断たれる。むしろ閑な椅子にゐて将来を築く方が島山氏の爲めでもあり、黨の爲めでもある……」

録

川崎の説明のあと、毛利は重い口を開いた。

「獵官も時によつては志を伸ぶる手段だ。島山を排斥して僕がその地位を奪ふといふ事も、それが時艱を救ふ唯一の手段なら私交を犠牲にせねばならぬだらう。……然し僕の志はもつと飛躍してゐるんだ。手つ取り早く目の前の現象に就いていへば、平野内閣を造るんだ。政友會と軍部と組む、民政黨を叩き潰して一國一黨にしてしまふんだ。さうして強い政治をやる。滿洲事變の後仕末。支那を手も足も出なくしてしまふ。勿論國際聯盟なんぞ脱退してしまふ。アジアに還るのだ……日本の生きる道はこれしか無いんだ。然し非常に危ない仕事だ。周密敏速な作戦が要る。愚圖々々小田原評定をしたリ、元老重臣の思惑から英米の鼻いきを氣にしてゐたのぢや何にも出来ない。後手になる……」

三人は、餘りにも事の意外に度膽をぬかれて黙りこくつてしまつた。それでは、五・一五事件を機會にしてフアツシヨ政治を計畫する或る一部の陰謀と同断ではないか。政黨政治への反逆者ではないか……われ等の大將が……」

「かういふと君達は僕が兵隊に降参したと憤慨するかも知れん。だがこの荒れ馬は口をとつて引つば

らうとするよりも、ヒラリと背中に乗つて走らせる方が上策だ」

「君なら乗れる……」

清水は重い口と目をいつしよに開いた。

「ぢや、黨の方はどうします」

川崎は不安さうな目をした。

「鈴木内閣だつて、差支へないぢやありませんか。軍と手を握れば」

土屋は、不満さうに言つた。

「僕も、情に於ては鈴木さんを總理大臣にしたい。が實際問題として到底望みはないのだ。それは僕の、情報網が確實に示してゐる。鈴木さんが、いゝ氣持になつて、單獨内閣を主張したり、軍部の口ポツトにはならぬと放送したり、すればする程駄目になつて来る。……あれ位、僕が注意してをいたのに口が軽すぎてお話にならん……」

毛利は、また改めて、腕を組んだ。嚴然たるその顔は蒼い。彼は、もち前の冷靜さを昂奮の餘り失なひでもした如くに續けるのである。

「いゝか、おい、支那だよ。問題は先づ支那だよ。あの蔣介石に、すつかりなめられてゐる日本を見

るが、四十そこそこの青年に、支那通を以て鳴つた七十七の木堂でさへなめられた。これは支那人の本性を底の底まで知らんからだ。僕は君等も知つての通り二十の歳からの支那屋だ。見る、あの將を始めとし、幹部といふ奴は、みな日本の留學生ぢやないか。日本の支那人教育は、即排日教育だつた。こんな馬鹿な算盤外れの話つて何處の世界にある。こいつを御破産にする、建て直しをして北支那を日本の別荘地にする。支那四億の人間に日本の品物を買はせるのが滿洲事變後の新しい僕の對支政策なんだ。白原外交は國賊外交だが、大養外交、吉井外交だつて一知半解の失敗を繰り返してゐる。いや兵隊も抜けてゐる。強がり一方で、賣つて儲ける事を知らん。敵つてをいて、撫でる、このコツは、僕でなくちやわかるまい……僕は、これ一つ仕遂げれば大半の政治目標は達成するんだ。その必要から國際聯盟を脱退する……内政は外政を整理する爲に、有ゆる政治勢力を單一化することしかない。之れに内から邪魔するのは、誰でも國賊だ。元老も重臣もない。もし政友會がさうなら政友會もない。民政黨なんぞは消滅して可い」

聽いてゐる三人は、おぼろ氣ながら、彼等の盟主の志が解つたやうな氣がし出した。たゞ政友會内閣を主張しないのが頗る不満な丈である。總裁の側近では、政務官から秘書官まで内定してゐるといふのに、こつちは肝腎の大臣さへ逃げてゐるのである。支那問題もいゝが……いや毛利の前でそんな

事を考へるさへ罪惡かも知れんぞ。

「わかつた。僕達が悪かつた」

いつの間に取り寄せたか、酒好きの清水はコップで三四杯あふつた後であつた。

「で、と毛利君。俺等は君の方寸通り火でも水でも飛びこむんだから、方角だけは示しといつて貰はんと困るぜ」

「それだ。それだ。大將それだ」

川崎と土屋は同音に叫んだ。

毛利と彼等との間には、一種封建的な主従關係に似たものと、俠客の親分、子分の間柄のやうな單純で強い感情が結び目になつてゐた。

「さういつて貰へば嬉しい。いや俺が悪かつた。も一つ言つてをくが、俺はまかり間違ふと生命が危ない。が慌てちや不可い」

「何故？」

「乗り手は御する積りでも、力が足りなければ振り落されて踏み潰される」

「わかつた。もうこれ以上訊くまい。野暮だ」

清水は叫ぶやうに言った。川崎と土屋は、感情をこめた目と目を見合せるのであつた。

四

「林君、昨日頼んでをいた計算、出来てゐるかネ？」

「はあ、みんなもつて來させてをきました」

「總計いくらかね」

「一萬二千五百二十圓五十錢です」

秘書の林は、ピンで綴つたひとまとめの紙片を毛利の前に差し出した。紙の數は十二三枚もあるか。赤坂、新橋、柳橋、日本橋の、いはゆるお茶屋から差し出した、未だ受取の判だけ押してない受取書である。毛利はバラ／＼と一通りめくつて見たが、目を通したのはお茶屋の名前だけである。内容は見なくとも、貴族院の誰々。陸軍の誰彼。海軍のあれ、乃至大阪からわざわざ招んだ實業家の某。乃至は新聞記者と一夕の會談をした、などといふ類。いづれも機密事項に屬するものである。

「これ文けかね、林君」

「はあ、この他に官邸の宴會費があります。まだ東西軒から届けて参りませんが、約三千圓と思ひま

す」

「それや、何だつたね」

「政友會の新當選代議士を、總理がお招びになつた祝賀會。それから貴族院の方々を、矢張り總理がお招きになつたあれ、それから……」

「ヨシ／＼。あの、毎日食ふ晝飯ね、あの方のも來てゐるか。閣議の晝飯と、それから、下の連中の辨當なんかあつたね……」

「はあ、あの方は千圓足らずと思ひます」

「ちや未だ全部集まつてゐるんだね。至急集めて合計を知らせてくれたまへ。明日は拂つてしまふ……」

「田川のは何う致します？」

「あれは君が心配せんでもいゝ」

「……しますと約二萬圓です」

「横水君を一寸よんでくれたまへ」

横水といふのは、内閣書記官である。



横水は、書記官長室のドアを排して毛利の大机の前に立つた。

「君、機密費は残つてるか？」

机のひき出しの手紙や書類を破りながら、横水の顔を見るでもなしに毛利は投げつけるやうに言ふ。  
「……残つて？ はあ、五萬圓あります」

「五萬圓？」

「上半期の分はすつかりお使ひになりました。下半期の分が五萬圓……」

「今日は五月だね。會計年度は四月からだね。すると四、五の二ヶ月で五萬圓使つたのか？」

「さうです。兎も角、林君の方へ差し上げてあります」

「おい林君、受取つてあるね」

「あります。然し、手許には二三百圓しか残つてをりません」

「すると？」

横水は、こゝで、後継内閣の書記官長に受けつぐべき帳簿面を早くも胸算用してゐる。下手をすれば、自分の落度になるからである。

「局長、月割りにして約三萬四千圓かへして頂かねばなりません」

「何だ、借金か、泣つ面に蜂かい、馬鹿々々しい。よし、解つた。よろし」

横水は、自分が悪いことでも仕でかしたやうに、恐縮し乍ら宅を出て行くと、毛利は例により腕を組んで、室の中を歩き出した。秘書の林は、金庫の側にをいてある自分の机にむかつて、計算をしてゐるやうである。

「すると、五萬……いや六萬圓なくちや官邸を引拂へないんだな。小者その他の手當も要る……」

ひとり、毛利はつぶやいた。

政權の中にある時であれば、金を作ることも比較的容易である。けれど、いまは内閣主班の凶死によつて、事実上犬養内閣は倒れて政權は宙に迷つてゐる。毛利は、官邸を引上げるための残務整理をしてゐる最中である。機密費年額十萬圓は、凡そ宴會費にも足りない。本年度、半期分は既に使ひ越しになつてゐる。政治資金として、書記官長の手で集めた金は、全部總理の手にわたしてある。死んだ總理から貰つて来る譯には行かない。さりとて、誰が来るかわからないが、後からの書記官長と事務の引繼をする時には、機密費が第一であること、自分にも経験がある。

「鈴木さんに二萬圓、鳥山に一萬圓出さすとして、あと三萬圓は、出せといつても出す奴がない。俺が作らにやならんか」

これから政権を取れさうだといふ時などは、電話一本でそれ位のもは、向ふから持つて来るのである。いま後継内閣を待つ間の残燭政権に對して、鏝一文も献金するものではないこと、實業界の情勢に通じてゐる毛利には、手に取る如くわかるのであつた。

「仕方がない。俺の手形で作る迄だ」

毛利は、室の西角まで歩いて、突當らうとする途端に、さう決心を定めた。

「おい林君、車を出してくれ。君はもう歸つていゝよ」

日はもう暮れた。初夏の夕暮に氣早い浴衣の人が街を歩いてゐる。毛利の車は、官邸の直ぐ下に在る田川の方へ下りて行つた。

「おい〜おつるはゐないか」

上り口から毛利は念がしまうに、用事を頭に浮べてゐる。例によつて、おつるがゐないと、事務が一ツも運ばないのである。

「おい、おつる電話で鳥山を呼び出してくれ、それから風呂と飯だ」

さういひ乍ら二階の、例の六疊の方へ一人で上つて行つた。折よく鳥山は宅にゐた。毛利の非家庭的な生活と異つて鳥山は、宴會さへなければ自宅で家族と共に飯を食ふ永年の習慣である。非常事件

の政變最中であるから、政界財界の人人に取つては、戒嚴令こそ實施されてゐないけれども、それと同様な異状態の下に、宴會といふ宴會は全部中止されてゐる。たゞ、毛利のやうに、待合を事務所にする政治家だけがかういふ街を必要とするだけであつた。

音響の洩れぬやうに、羅紗を張りめぐらして密閉した電話室の中で、毛利は鳥山文相と話してゐる。「……で、總裁に二ツ、君に一ツ振り當てたんだ、後を濁さぬ様にしたからなア。何？ 舞田にも出させるつて？ 出しやしないよ。これから大臣になるんぢやないんだ……呑氣なこと言つてゐるね、どうせ次はこつちの天下だから、明日や明後日といはなくても可い？ さうは行かんよ。見當が異ふよ、もう番町を素通りして大久保の方へ近づいたぜ、アテにしてゐるとピツクリして心臓麻痺を起すよ。……まあいゝや、そんな事はどうでも、明日一本もつて来て呉れ、鈴木さんへはこれから行つてさういふから……ナニ？ 今夜三人で會ふ？ よからう、だがネ、新聞記者が寝ちまつてからでなくちや危険だ。——ウンさうだ、鈴木さんにね、君から電話をして十二時になつたら門を閉めさせるんだ。新聞記者の引上げた後で落合ふことにする……いつたい其の電話の側には誰か人がゐるんぢやないか？ 何？ 奥さんと田村に飯野、仕方がないな、君はのんき過ぎるよ。君の方から、デマだの秘密だのが頻りに飛ぶんだ。それがそつくり其の儘候の方へ入るんだ。困るね。君と僕の間をさいて

その間隙に乗じようといふ魔手が動いてゐるんだぞ、しつかりしないと、君なんぞは甘いから乗せられるんだ。僕と話したことは、絶対に洩しちやいかん。いまが肝腎な時だ。わかつた？ ちや十二時半……」

電話を切つた毛利は例の六疊へ歸ると一人言のやうにつぶやいた。

「家庭圓滿もよしわるしだ」

鈴木新總裁の兩翼といはれる鳥山文相と毛利書記官長は、然し性格は全然異つてゐた。故にこそ夫婦の様に存在した。鳥山の方は秘密はもたぬ、毛利は極端に秘密を、愛好しさへする。鳥山は積極的に働らきかけて情報を取ることをしないのに、毛利は、有ゆる方面から積極的手段で情報を蒐める。鳥山は潮にのつて自然に押し出されるを待つ風があるに對し毛利は潮が自分と逆にさす時にも強引に潮を乗切らうとする男であつた。

鈴木とこの兩人との關係をいへば、何も鈴木の子分とか幕下とかいふのではない。鈴木を立てることによつて彼等の地歩に便宜を得ると共に、黨内の新勢力に對抗する足場を作るに在つた。だから、子分を持つといふ點からいへば、鈴木直系といふべき者十人位に對し、彼等に各々ついてゐるそれを合計すれば黨の半数を占むる勢であつた。鈴木は兩人の擔ぐ駕に乗つて進む客であつた。どちらかが、

俺はもう擔ぐのは嫌だといひ出せば、駕は一步も前進しなくなるのみである。

毛利の幕下には、俠客風な氣分があつて、親分の爲めには水火を辭せぬ強硬分子で固まつてゐたし、鳥山の方は、智識的な分子が集まつてゐた。だから、自然と兩派の氣風は異つてゐる。けれども鈴木新總裁を中心にして兩人が仲よく駕の前後を擔いでゐるから、大勢の者は、鈴木を焦點として集中してゐるのである。

これを、黨内の反對勢力、または反對黨乃至政黨政治否認の陣地から展望すれば、極めて心憎い邪魔な一團である。この一角を崩すことは、己が力を伸ぶることになるのである。政變を機として攪亂の策謀は、有ゆる方面から伏兵となつて表はれ始めた。

毛利はフアツシヨである。政黨政治の攪亂者である。鳥山を押しつけて自分の權力を伸べんとする、といふ放送が飛び出せば、一方毛利に近い方面からさへも、鳥山を陥れる爲めの怪文書が飛び出すといふ有様であつた。中間のある者が毒ガス作業をやつてゐると注意する者は少なかつた。政變に對する兩人の觀方、考へ方に相當の距離あることがだん／＼判明するにつれて、兩派の幕下達は、魔手を反省する隙もなく、鳥山派は毛利を、毛利派は鳥山を各々公然と中傷しはじめさへしたのである。

毛利が電話で、鳥山に注意したのは、この故であつた。兩人の力を加へれば三人前四人前にプレミ

アムがつく。割れれば額面以下にしか買はれない。それを毛利も鳥山も各々肚の中で心得てゐた、けれど、幕下はそれに對して反省をもたなかつた。危機はそこに在つた。

五

政變の幕は、上京した元老を中心にして、靜かに進んで行つた。一夜を、駿河臺の邸で黙考した東安寺公爵は、その翌朝、まづ臨時首相の高橋藏相の來邸を求めた。

臨時首相から責任ある「政府當局」の話聴いて、次には内大臣の牧山、樞密院議長の倉橋など、いはゆる重臣が招かれた。民政黨の總裁である若月は、總裁の資格ではなく、前の總理大臣として意見を徴されたし、清原子爵、山川權兵衛伯などもその意味で意見を聴かれた。

不思議な現象が消息通の間に、早くも知られた。高橋は現に政友會の最高顧問の地位に在つたにも拘らず、政友會の鈴木總裁を推してゐないといふことであつた。また若月は、政黨人の立場から立憲政黨は暴力によつて破壊さるべきでないといふ新聞記者への談話から推論しても、當然政友會内閣の延長を進言すべき筈であるのに、矢張りこれをしてゐないことであつた。いづれも舉國一致をいつたといふ消息なのである。

これ等の中で、一人變り者がゐた。それは山川であつた。

山川伯は、東安寺公の使者にむかつて訊いた。

「拙者の意見を聴けといふお上の御思召であるか、または東公独自の意見であるか」  
使者の山内といふ貴族院議員は答へた。

「公爵が、御下間に奉答する爲めの豫備知識に、閣下の御意見を承はりたので……」

權兵衛は、昔からこの老人に對して好感をもたぬ。

「お上のお思召ならば参内して申上げるが個人の参考のために意見を申上げることではでき申さぬ、左様お返事下さる」

權兵衛は平野内閣を要望して居つたが、東安寺は、平野に對し、好感をもたないので、この實現性はない、と見透してゐるらしかつた。その山川伯が、元老に楯をついた丈で、陸軍の上原元帥、海軍の東郷元帥、招かれるまゝに駿河臺へ行つて慎重に意見を聴取されたけれど、誰一人として政友會の鈴木内閣を言ふ者はなかつた。これ等の人々は、根が政黨と反對側の人々であつた。または、總裁その人に對して好感をもてぬ人もあつた。又は、政友會と民政黨の協力内閣にして、民政黨の立場を好くしたいといふ下心の人であつた。

かうしてゐる間に、突如、大映しに描き出された人物は、朝鮮總督を前後十年もねばつて、今は全く隠居の境界に在る過去の人、齊藤誠子爵である。齊藤擔ぎ出しの策謀は、毛利力の情報網にはとうに人つてゐた。毛利には初耳ではないが、鈴木や鳥山には爆弾に等しい驚異感を與へた。

鈴木單獨内閣を單的に主張したが、形勢不利と見て、民政黨との聯立は御免蒙むるが、軍部の意圖をとり入れて、天下に人材を求め、之れを入るゝに吝かでない、と折れて來た鈴木にして見れば容易ならざる敵の出現である。人材も、非人材も、齊藤内閣とならばこつちの發言權は根こそぎ奪はれてしまふ。そこで、鈴木のうちた手は、この新らしい敵にそなへる爲めの示威として超然内閣絶對反對、入閣絶對拒否であつた。それを高調して、示威運動の爲めに、代議士會を開いて激越な演説をさせる、といふ段取りであつた。(三百三名を除外して内閣が出来る筈はない。)

毛利は、しかし今や明らかに總裁のやり口に反對であつた。彼は、齊藤の可能性を未だに信じない。陸軍の内部情勢に照して、妥協主義、沈靜本位の政權で彼等が納まる筈はない。だから、鈴木も齊藤も、所謂アテ馬の役をするに止まつて、落つくさきは大久保の住人平野騏太郎に定つてゐる、と信じてゐる。

平野と毛利は、親しい間柄でも何でもなかつた。平野は、樞密院の副議長で、右翼精神主義團體で

ある國幹社の總裁、それで陸軍の中心に或る種の觀念的な信任があるといふに過ぎない迄のことで、大政治家とも、抱負經綸ある英傑とも思つてはゐない。たゞ平野をロボットにして軍と結び、過渡時代をのり切るべく一國一黨的強力政治をやる以外に、日本を窮地から脱却せしむる道はないといふ考へが根幹をなしてゐたのである。

勿論、平野内閣ならば自分が第一に入閣する。そして大政友會を右手に、巨大な軍部を左に携けて難局打開のメスをふるふ。椅子の如きは問題に非ず、これが毛利の志である。

## 六

趣町六番町、鈴木友三郎邸に初夏の夜は深々と更けて行つた。

新聞記者は、とうに引き上げてしまつてゐる。たゞ代議士が二名と、それから豫備ではあるが陸軍の主計總監である大野長太郎が階下の應接間に控へてふるまひ酒の餘りをなめてゐる。鈴木、陸軍の消息は、大部分この大野から受け取る。大野は或る部面の上層部とは通じる所があり、彼一流の消息と、聯絡とをもたらすので、鈴木は、この際、最重要人物の一人として、相談相手としてゐるのである。

「大野さん、どうかネ大丈夫やろか。齊藤説が大分強くなつて来た様やが」

鈴木秘書官井上は、今度は參與官に昇格する筈だ。気が氣ではない。

「大丈夫とも、太鼓判を押すよ。わが陸軍の意志を無視して内閣が出来るものか。わが陸軍はちや、田中さん以來政友會に好意をもつちよる。政友會は元來が積極政策で、吾輩どもとよく馬が合ふ。あの民政黨たらいふ支那人の政黨は、あれや駄目ぢや」

大野はもう好い加減、祝酒がまわつて居る。何しろ、五六時間絶え間なく鈴木内閣を飲んでゐるのである。

「けふは晝間、海軍の將校が二人来て、總理……いや大臣に會つたが、何をいふかと思ふと、政黨意識に捉はれずに、公平な政治をやつて頂きたいと注文をつけてをった」

これは、今度總理大臣秘書官になる筈の新代議士、鈴木丸抱えの橋野である。

「大臣は何と答へた」

大野が首をのびした。

「わかつた、大いにやる。君等も國家の爲めに大いにやつてくれい、といつて握手をしたところが、連中、入つて来た時の恐ろしい顔が惠比壽顔に變つた。海軍の青年將校が鈴木内閣と見透しを

けて居る位だから、海軍出身の齊藤さんは噂だけに過ぎないぢやないか」

「それは縁起がいゝ。どうも大野さんの前だが、陸軍の青年將校は不謹慎やな。何ぼ士官候補生いふたかて陸軍は陸軍や、それ等がわが黨の總裁を殺しをったのに、この機逸すべからずとばかり、平野内閣ぢや。軍政府ぢやと……二階に居る毛利力まで引づり込まれちよる、何ちうこつちや。そこへ行くと海軍の方は、大臣が、軍人は政治に關與すべからずちうお布令を出して居る。尤も現役海軍軍人が主役をつとめとつたといふこともあるが、兎も角謹慎の意を表さう、ちう精神はえゝ。あれでなくちやあかん。けふ來た將校も憲政が暴力によつて破壊されちやあかんちう建前を知つとる」

井上は、一流の關西辯でまくし立てた。

「ハ……都合の好い方にばかり取り居るナ。鈴木内閣を是認した點はいゝが、注文をつけに來よつた點は立派な政治關與ぢやないか……海軍も陸軍も、政治の現状に不満な點は同じぢや。鈴木内閣でひとつ、積極進取の政治をやるんぢやナ。君等もいそがしくなつて結構ぢや。及ばず乍ら吾輩も、陸軍上層部との聯絡は怠りなくとつて進ぜよう」

「時に、二階はいやにしんねりむつゝりと靜かにねばつとる。閣僚の詮衡から、政務官、秘書官の取り定めとなれや、何しろ大政黨だから、時間もかゝらうといふものだ、どれ、一寸様子を見て來よう」

橋野は、やがては、かういふ風にして首相官邸の閣議室へ入つて行くのだ、と思ふと胸がわく／＼するのであつた。

二階では、鈴木、島山、毛利の三人が、茶器の散らばつた紫檀の大机を中に置いて、まれに見る緊張を示してゐる。

「……ちや君は政友會を見離して軍閥官僚と握手するといふのかネ、毛利君」

さういふ鈴木の手は、膝の上で、震えてゐる。思ふに、十二時半から、一時半まで、一時間といふものこの論が続けられたらしい。

「鈴木さん」

と言つたが、毛利は改めて、

「總裁！」

と叫ぶやうに呼んだ。

「僕も毛利作太郎の息子です。官僚や軍閥の爲めに、親父がどんな苦しい思ひをしたか、よく知つてゐる積りです。失禮ですけれども貴方のやうに、役人の秀才として官界の順風に帆を上げ、必要に迫られて政黨に入られた心境とは根本的な違ひがあります」

「それだから言ふのだよ。毛利作太郎翁といへば日本政黨史上の重要人物、その御親父に仕込まれた君が、今日に及んで、軍の若い者達と手を握つて、官僚の本尊を立てやらうといふのだから話がわからなくなる。君のいふ通り、僕などは中途からの政黨員だ、だから君などこそ、僕等を引づつて、政黨政治の爲めに闘つてくれるべき筈と思ふのだ」

「政黨員が、徒らに大臣や役人になりたがるこの根性が、政黨の末期現象を代表してゐる。第三期症状です。これにメスを入れなければ元も子も無くしてしまふ。今がメスの入れ時です。潮時は丁度好い。手遅れになれば足腰が立たなくなつてしまふ。休業して入院する時だ。兎も角、明日の代議士會は取り止めるやうに指令をお出しなさい。一時の感情に支配されて、力もない者が力の有り餘る者にぶつかつて行くといふのは此上もない愚擧です。入院する前に絶命してしまふ」

「代議士會は、時局がデリケートだから、といふ理由で取止めさすことにしても可いが、君もこんな考へだと、超然内閣出現拒否に、わが黨の威力が半減されてしまふ。も一度考へ直して見てくれたまへ。實は、昨日君の方の清水に土屋、川崎が來て、君の椅子に就ても懇談したのだ。今更ら離反されでは困つてしまふ」

「僕の椅子のこと？ あれはハッキリ言つてをきませんが、僕の意志ではない、僕の方の政黨員さへが

用 あゝいふ真似をする。だから叩き直さなければならんといふのです」

この時、沈黙を破つた鳥山和郎は始めて口を切つた。

「あれは君の意志ぢやないのか。あれを總裁から聞いて、僕は僕で、君に内務の椅子を譲り、ゴルフでもやらうといふ風に、一人で定めてゐたのだ」

「ハ……鳥山、それや又有難い話だ。が、僕は君を押しつけて、鈴木内閣の内務大臣になるやうなことは、恐らくお互の生きてゐる中にはあるまい」

皮肉ではない。深い喟嘆が毛利の胸に在つた。鳥山は、毛利は矢張り、デマの如き野心をもつ者でなかつたと思つた。そして新らしい親しさが湧いた。

然し乍ら、親兄弟と雖も山へ登らうといふ者と、海へ行かうといふ者に話しの合ふことはなかつた。片方は山へ行かねば健康が恢復せぬと考へる。片方は海へ入らなければ駄目だと思ふ。海の方は目の前にひろがつてゐる。山の方は途が険しく複雑である。

「總裁。僕は決して貴下を裏切る者でもなければ政黨を捨てて軍人官僚の使用人になるものでもないのですよ。僕を信じて、この際は、平野内閣の副總裁で我慢する決心をつけて下さい。でないと、政友會それ自身が世帯が持てなくなる文です。そのみか、貴下自身が立枯れになります」

毛利のツケ／＼言ふ無遠慮さに、鈴木は心中甚だ面白くない。然し持前の「馬鹿」を爆發さすべく、餘りに彼は毛利に押されてゐた。

「僕と平野とは司法畑の舊い友人だ。平野が政權をとつてから頼まれ、ば否とは言へまい。が既に超然内閣絶對反對の旗を出してある……」

「それがいけないんです。それだと萬が一、齊藤が出てきつと援助する様になる。引づられたんぢや駄目です。引づるんでなくちや。總裁！僕は引づつてゐるんですよ……」

鳥山は、鈴木よりも毛利よりも弾力性を有つてゐる。毛利のやうに、金と手間をかけて積極的情報を蒐めてはゐないが一種のカンで一種の見透しをつける特有な神経をもつてゐた。

「民政黨から、聯立の便が來た。三井文吉がやつて來たんだ今朝。勿論お話しにならぬといつて断はつたが、然し齊藤でも出て、全るつきり搦つ拂はれるよりは、聯立の方がマシぢやないか」

「聯立も絶對反對の聲明がしてある……今更屈する譯にも行くまい」

これは、深い吐息の間に洩す鈴木の言であつた。

「鳥山！その考へが災ひするんだよ。夜店のバナ、ぢやあるまいし、一體何度呼び値が下落してゐるんだ。單獨内閣から、人材吸収、聯立反對から聯立オーライ。この次はたとへ超然齊藤でも足輕草



附 腹とりに成り下るのは知れてゐる。一體貴様は認識不足だ」

お前、貴様が出る時は、この兩人の心が底の底まで解け合つてゐる時であつた。が今夜のそれには、その逆傾向があつた。それを見て取つた鈴木はさすがにハラ／＼して爆發を食ひ止めようとした。

「おい／＼君達は兄弟喧嘩を始めて老寄りを手古摺らす積りかい。見つともない、止せ／＼。俺は政権を取り逃しても君等兄弟をにがしたくないぜ。この方が餘程欲が深いだらうアハハハ」

「俺」といふ一人稱にまで、故意に碎けた鈴木の冗談は然し、彼の善人、單純、従つて強さうでも無い性格の吐からの本音である、と先づ觀取したのは毛利である。思はずその眞實にうたれた。

「鳥山！ 喧嘩は止さう、親父が泣く」

「止してねるか。お前も思ひつめてゐすぎる。一ねむりして来いよ。僕も眠い。又明日の事にしませう、鈴木さん」

鳥山の動議に對しては、もう誰も異議はなかつた。

苦蟲を潰した様な顔をして毛利が先づ下に降りた。そこに待つてゐる大野に目を注いだ毛利は肚の中で舌打ちした。

「大野君、君の方の中心はとうの昔に外れてしまつたね。總裁は甘くて人がいゝんだから、泣かさん

様にして呉れ」

と言つた儘、その返答に耳をかさうともせず、草履をつゝかけて出て行つた。

## 七

凶變後、十日間の難航を経て出来上つた政權は、齊藤内閣であつた。鈴木も毛利も、鳥山も各々の思惑はガラリと外れたのである。そして、新内閣に閣員を送つた大政黨は、全く餌に吠えるヤセ犬と化した。今まで、憲政の常道を唱へてゐた新聞といふ新聞は、ケロリとそれを忘れ、木鐸を叩いて、元老の頭の好さをたゞへた。日本のフアツショはこの日を出發點とした。

新らしい書記官長と事務引つぎを濟ませた夜、毛利は田川の大廣間に、清水や土屋、川崎など一黨十數名といつしよに、澤山の藝妓に取繞かれてゐた。

「さあ、みんな飲め。首途の祝ひだ。お互の世界はいよ／＼之からだぞ。いよ／＼、俺の天下が近づいて来た。……徹底的に踏みつけられて初めて、眞個の強い力が湧いて来るのだ……」

毛利が、何時に似ず、酔つて饒舌である。おつるは眉をひそめた。先生は疲れ過ぎてゐらつしやると思ひながら、そつとその側へ行つた。

「先生。失禮して少しお休みになつたら如何でございますか」

毛利は、キツと目を見ひらいた。

「心配するな、おつる。酔つて愚痴をいふとでも思つてゐるんだらう。馬鹿な。未だそれ程やきは廻つちやないさ」

「でも先生。毎晩の睡眠不足でゐらつしやるんですから」

「心配するな。みんなが、あんなに好い氣持に酔つとるぢやないか。おつる。杉との相談な、けふ杉と具體的に話を進めた。も少し待つとれ」

おつるは、止なく座を外した。襖の外へ出ると、そつとハンケチを出して目頭の熱いものを拭つた。(終)

### 非常時局と人物

昭和十二年三月七日印刷  
昭和十二年三月十一日發行

定價壹圓七拾錢

著者	山浦貫一
發行者	福岡信夫 東京市神田區三崎町二ノ一六
印刷者	山本禎男 東京市牛込區山吹町一九八
印刷所	株式會社宗文社印刷所 東京市牛込區山吹町一九八
製本所	龍野製本所
發行所	信正社 東京市神田區三崎町二ノ一六 電話九段一四二二番 振替口座東京八五六一五番

# 志士秘録

著 野 淺 郎

○五・一 價定  
四一・〇 料送

何を志士といふ。朝にあつて經綸を行ふ志士もあれば、野にあつて權勢に抗する志士もある。  
明治・大正・昭和三代に亘る刺殺事件を拉し來る十數事件、その底に流れる暗流の原因と行方を研討した。本書こそ血を以て書かれた近代政治秘史であり、この非常時萬人必讀の大文字である。頭山滿・小久保喜七・肥田琢司三氏の序は錦上花を添へて餘あるものがある

# 今日を創る人々 人物論

著 來 間 恭

○六・一 價定  
四一・〇 料送

今日の日本及び外國に於て政界・財界・官界・軍人界・學界・新聞界の各方面に亘つて拉し來つた約七十名、往くとして可ならざるなき著者の筆陣は牙え渡つて諸人物を浮彫にして餘すところがない。この非常時必讀の一書だ！

# 秋鳥集

作品集

今井邦子著

定價 一・九〇

送料 〇・一四

凡ての女性にとつて最良の心の糧であるばかりでなく、男性の讀者にも亦得難き他山の石といふべきであらう！

「處女に語る」「母の告白」「母となりし娘へ」を始めとして、「女の言ひ分」その他の犀利なる評論、それに隨筆、歌篇を添へて本書こそ女性の教養の最高位を示すものであらう。



